SYONEN SYOZYO

Sekai Bungaku Jensyû

アラビアン・ナイト
ラーマーヤナ バールミーキ
インド民話

ほか3編

少年少女世界文学全集

東洋編(1)

アラビアン・ナイト

大場正史訳

ラーマーヤナ

バールミーキ作・田中於菟弥訳

インド民話

田中於菟弥訳

ほか3編

講談社

41

少年少女世界文学全集41
東　洋　編　第1巻

著者の了
解により
検印廃止

N. D. C. 929
講談社　昭和35
422 p　23 cm

昭和35年11月20日発行

訳者代表　大場正史
発行者　野間省一
印刷者　北島織衛

発行所　東京都文京区音羽町3ノ19　株式会社　講談社
振替口座東京　3930　電話大塚（941）大代表 3111

印刷　大日本印刷
製本　和田製本
本文用紙　本州製紙
背皮　厚川株式会社
クロス　日本クロス

定価　380円

© 大場正史　昭和35年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

PRINTED IN JAPAN

目　次

少年少女 世界文学全集

第 41 巻
東洋編第 1 巻

アラビアン・ナイト……大場正史訳……9
船乗りシンドバッドの物語……11
一回めの航海……12
二回めの航海……19
三回めの航海……26
四回めの航海……35
五回めの航海……45
六回めの航海……52
七回めの航海……57
紺屋のアブ・キルととこ屋のアブ・シル……62
道化者ハサン……85
アーマッド王子と仙女ペリ・バヌ
——空とぶじゅうたんの話——……109
アラジンとふしぎなランプ……143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アリ・ババと四十人の盗賊……194
ぬすまれたさいふ……216
ホスロー王と漁師……219
ちえくらべ……221
王書物語……カーシム・フィルドーシー作　蒲生礼一訳……223
ロスタムの白おに退治……225
ソホラーブの白城攻撃……235
ロスタムとソホラーブの一騎討ち……242
トルコ民話……竹内和夫訳……257

ろば耳の王子……259
ナスレッディン・ホジャの小話……270
ラーマーヤナ……277
バールミーキ作
田中於菟弥訳
一、おいたちの巻
ダシャラタ王のねがい……279
神々のそうだん……279
ラーマの誕生……280
ラーマの初てがら……282
シバの弓……283
ラーマとシーターの結婚……284
二、アヨーディヤーの巻
ラーマ王子の立太子式……284
せむしのマンタラー……285
カイーケーイーの横やり……288
ラーマの追放……289

ダシャラタ王の死……291
バラタ王子の正しい心……292
金のくつ……294

三、森の巻

ダンダカの森……296
あくまの一族……297
ラーバナのふくしゅう……298
金色のしか……299
はげたかジャターユスの奮闘……300
ラーマのなげき……302
怪物カバンダ……303

四、キシュキンダーの巻

さるの王スグリーバ……305
スグリーバとバーリンのあらそい……306
キシュキンダー城の決闘……307
シーターさがし……309

五、うつくしいランカーの巻

ハヌマットの一とび……311

ランカーの町……312
アショーカの花園……313
ハヌマットのかつやく……315

六、大決戦の巻

ラーマの進撃……318
ビビーシャナの投降……320
ランカーへの橋……322
たたかいの準備……323
総攻撃……324
ラーマとラクシュマナの危難……325
さるの軍の奮闘……326
ラーバナの出撃……327
クンバカルナの奮戦……328
インドラジットの死闘……330
ラーマとラーバナの決戦……331
シーターとの再会……332
アヨーディヤーへのがいせん……333

うずらのあだうち……337
四人のバラモンのたからさがし……340
ペペリーナひめ……347
わにの王さま……353
ねむっている守り神……358
カブールからきたくだもの売り（ほか）……371
山室静訳
ラビンドラナート・タゴール作
カブールからきたくだもの売り……373
むかし、ひとりの王さまが――……383
子どもの詩三つ……391
故郷へのあこがれ……394

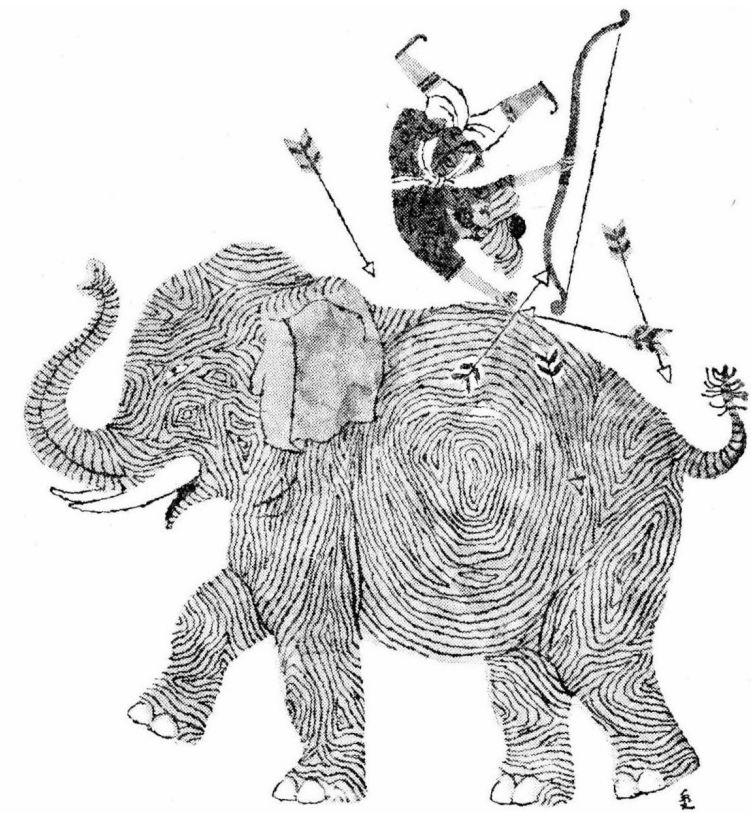
解説……訳者……404
読書指導……読書指導研究会 滑川道夫 沢辺寿一……417

装本　池田仙三郎
さしえ　沢田重隆
田中田鶴子
油野誠一
太田大八
田中実一
大沢昌助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アラビアン・ナイト

大場正史訳



アラビアン・ナイトについて

「アラビアン・ナイト」のほんとうの題名は「千夜一夜物語」といって、大むかしから、中近東の国々、つまり、アラビアやペルシアやエジプトなどにかたりつたえられた、さまざまな民話をたくさんあつめたものです。

聖書についで、世界じゅうでもっともひろくよまれている書物で、「ひらけ、ごまよ。」のアリ・ババ、まほうのランプを手にいれたアラジン、海の冒険で大金持ちになったシンドバッド、あるいはまた、空とぶじゅうたんの話などは、だれひとり知らないものはないでしょう。

こういった物語は、これまで、なんべんとなく児童むきに書きなおされてきましたが、ここには、世界一といわれるバートン版「千夜一夜物語」から、もっとも有名な話のほかに、たとえば「道化者ハサン」や「紺屋ととこ屋」のような、あまり知られていない話をくわえて、ぜんぶで十編えらびだし、できるだけ原文にちかい形であじわってもらうことにしました。

(大場正史)

さしえ・沢田重隆　田中田鶴子　油野誠一

船乗りシンドバッドの物語

名君ハルン・アル・ラシッドが教主（カリフ、つまり回教徒の王のこと）として世をおさめていたころ、バグダードの都に、軽子のシンドバッドといって、人の荷物を頭にのせてはこんで、ほそぼそとくらしをたてている男がありました。

ある夏の日ざかりに、重い荷物を頭にのせて、よろめきながらあるいていると、道ばたに一けんのやしきがあって、門前はうち水のあともすがすがしく、きれいにはきよめてありました。

門のそばには、大きなこしかけがおいてあったので、軽子はその上に荷物をおろして、一休みしました。

すると、中庭のほうから、すずしい風がそよそよとふきよせ、そよ風にのって、こころよいにおいも、ほのかにただよってきました。そしてまた、山ばとや、ものまね鳥や、夜なき鳥などのなき声にまじって、リュート（ギターにた楽器）のしらべや歌声までがつたわってきたのです。

軽子のシンドバッドは、なんとなく心がうきうきして、そっと、門の中をのぞいて見ました。すると、ひろびろとした花園をかこんで、おおぜいのどれいやめしつかいや宦官（去勢された男のどれい）などがずらりといならび、山海の珍味や酒のかおりが、あたりいちめんに、かぐわしくただよっていました。

軽子は、ごうせいなうたげのさまを見ると、重荷にあえいではたらく、まずしいわが身があわれになって、思わず天をあおいで、たんそくしました。

それから、ふたたび荷物を頭にのせて、たちさろうとしました。そのとき、美しいきものをきた、ひとりの小姓があらわれて、軽子の手をとって、いいました。

「どうぞ、中へおはいりください。主人があなたにお話があるそうですから。」

軽子はていねいに、ことわりましたが、小姓はいうことをききません。そこで、軽子は門番に荷物をあずけると、小姓のあとについて、やしきの中へはいりました。

軽子が案内されたのは、大きな、すばらしい客間で、そこ

には、身分の高い客人たちが、この世にまたとないような、おいしいごちそうや、くだものや、ぶどう酒などのならんだテーブルをとりかこんで、すわっていました。また、広間のかたすみでは、美しいどれいむすめたちが、楽器をかなでながら、歌をうたっていました。

そして、いちばん上手の、一だん高いところに、まっ白いあごひげをはやした、上品な老人がすわっていました。軽子は一座のようすをながめると、きもをつぶして、ひとりごとをいいました。

「いやはや、たまげたもんだ。こりゃ天国か、それとも、王さまの御殿にちがいないぞ。」

軽子はゆかにひざまずいて、一座の人々にていねいにあいさつをしました。すると、この家の主人である老人は、ちかくによってすわるように、と、ことばをかけてから、めしつかいたちにいいつけて、いろとりどりのたべものをならべさせました。

軽子はえんりょなく、ごちそうをたいらげると、手をあらいきよめて、老人に心からお礼をいいました（回教徒は、はしや、ホークなどをつかわないので、食事の前後に手をあらう）。

主人の老人はそれにこたえて、もうしました。

「よくまいられたのう。ところで、おまえさまの名まえと、ご商売をうかがいたいが。」

「はい、わたしはシンドバッドといって、人さまの荷物をはこんで、かせいでいる軽子でございます。」

あいてのへんじに、主人はびっくりして、いいました。

「これはまた、みょうなめぐりあわせじゃ。わたしの名もシンドバッドで、世間では、船乗りシンドバッドとゆうておる。見られるとおり、わたしはこうやって、栄耀栄華をきわめて、ぜいたくなくらしをしておるが、これまでになるには、どえらいなんぎや苦労をかさねてきたのじゃ。その話を、これからおきかせするとしよう。わたしはぜんぶで七回も航海したが、そのひとつひとつに、きもをひやすような、世にもふしぎな冒険談があるのじゃ。では、みなさん、おききくだされ。」

一回めの航海

わたしの父親はこの都の有力なあきんどで、大金持ちで

あったが、わたしの小さいじぶんに、たくさんの遺産をのこして、死んでしまいました。ところが、このわたしは、一人まえになって、財産が自由になると、きれいなきものをき、おいしいごちそうをたべ、大酒をのんで、ぜいたくざんまいな生活をつづけました。おなじ年ごろの道楽むすこたちとつきあって、放蕩のかぎりをつくしたのです。そういった安楽な生活がどこまでもつづくように思いこんでな。

ながい年月、そうやってくらしているうち、じぶんのおろかなふるまいに気がついて、正気にかえったときは、もうあとのまつり、財産はすっかりつかいはたしていました。

悪夢からさめたわたしは、詩人の文句ではないが、

栄耀栄華を手にいれたくば、
夜もねないでつとめにゃならぬ、
しんじゅがほしけりゃ、海原の
底の底までもぐらにゃならぬ。

ということに気がついて、ひとつ異国へあきないにでてやろう、と決心しました。

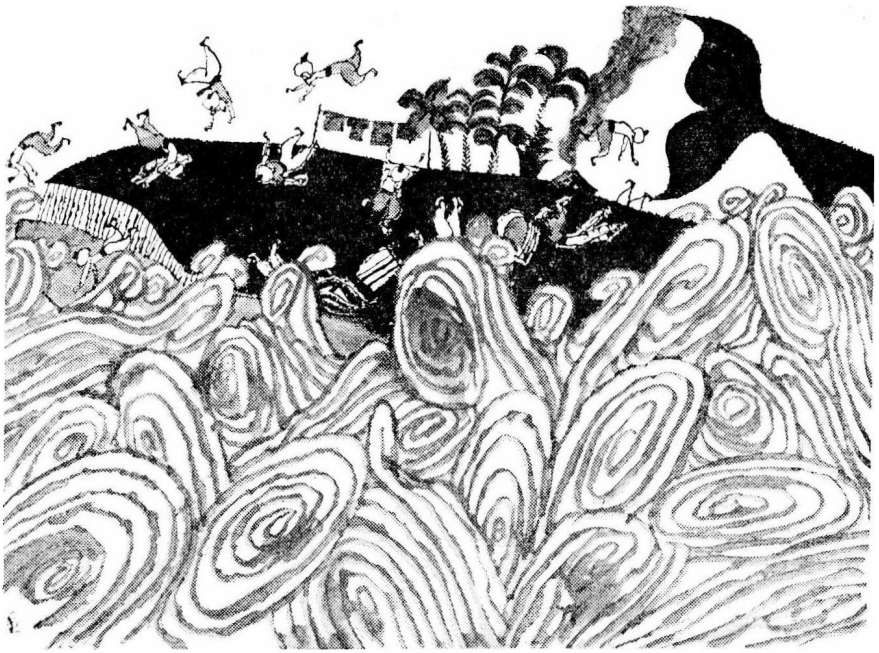
そこで、のこっている家財道具やら衣類をみんな売りはらって、いろいろな商品とか、ながい航海に入用な品々を買いこみました。そして、一団のあきんどたちといっしょに、バッソラーゆきの船にのりこんで、チグリス川をくだりました。

バッソラーで船をかえたわたしどもは、その後、いくにちも、いくにちも、航海をつづけて、島から島へ、岸から岸へと、売り買いをしながら、すすんでいきました。そのうち、天国の花園かと見まがうばかりに美しい小島にたどりついたのです。

船長はさっそく、いかりをおろして、上陸用の板をわたしました。船客はみんな島にあがって、火をおこすやら、せんたくをするやら、料理をするやらで、てんてこまいです。

わたしは、ほかのなかまといっしょに、島のけしきを見物してあるきました。ところが、まもなく、船長がふなべりから、大きな声をはりあげて、どなりだしたのです。

「おうい、みんな早く船へひきかえしてくれ。これは島じゃなくて、海面にうかんでいる大くじらだぞ。そいつのせなかにすながつもり、木がはえて、島のように見えたんだ。とこ



ろが、お客さんが火をおこしたので、くじらのやつ、熱くなって、動きはじめたのだよ。さあ、ぐずぐずしないで、ひっかえしてくれ。さもないと、くじらが海中へもぐって、みんなおぼれて死んでしまうぞ。」

さけび声をききつけた船客たちは、みんなふるえあがっておどろき、なにもかもおっぽりだして、われさきに船へかけもどりました。けれども、なかには、船へもどれない連中もありました。それというのも、きゅうに島がゆれだしたかと思うと、せなかにのっていた人間もろとも、底知れぬ海中へ、すがたをけしてしまったからです。

わたしも、この不幸な連中といっしょに、いったん海中にしずみました。が、まもなく水面にうきあがると、船でつかっていた、あらいおけが目にとまったので、いっしょうけんめい、これにすがりつきました。そして、おけにまたがると、波のまにまに、両の足をかいにして、こぎつづけました。船はそのあいだに、帆をあげて、どこかへいってしまいました。

やがて、日がくれましたが、わたしはその夜も、つぎの日も、風と波にもてあそばれながら、ただよいつづけました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com